

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

版 B6判  
三五二頁  
三五〇〇円  
連句の実作・鑑賞・研究に  
必須の知識をすべて網羅！  
初心者から研究者まで使え  
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

### 収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越  
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字  
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木  
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋  
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山  
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

## 水原秋桜子編 二三〇〇円 俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

## 水原秋桜子編 二八〇〇円 現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重視なし

## 大後美保編 二八〇〇円 季語辞典

日本の季節にまつわる言葉をストック・不快指数などを収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

## 中村俊定監修 四五〇〇円 難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一〇〇〇〇円

国語慣用句大辞典 白石大三編 B5 六二〇〇円

国語慣用句辞典 白石大三編 B5 二二〇〇円

国語史辞典 林巨樹他編 B6 三三〇〇円

日本語源語辞典 堀井金以他編 B5 一八〇〇円

京都語辞典 井之口・堀井編 B6 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 天沼 寧編 B6 二二〇〇円

隠語辞典 榎垣 實美編 B6 二二〇〇円

近世上方語辞典 A5 一五〇〇円

花柳風俗語辞典 堀井金以他編 B6 三三〇〇円

明治新語俗語辞典 堀井金以他編 B6 三三〇〇円

難訓辞典 中山善典編 B5 二二〇〇円

名乗辞典 荒木良道編 B6 二二〇〇円

名数数詞辞典 森 隆彦編 B6 二二〇〇円

あいさつ語辞典 奥山益朗編 B6 一八〇〇円

新版 ことば遊び辞典 鈴木兼三編 B6 一八〇〇円

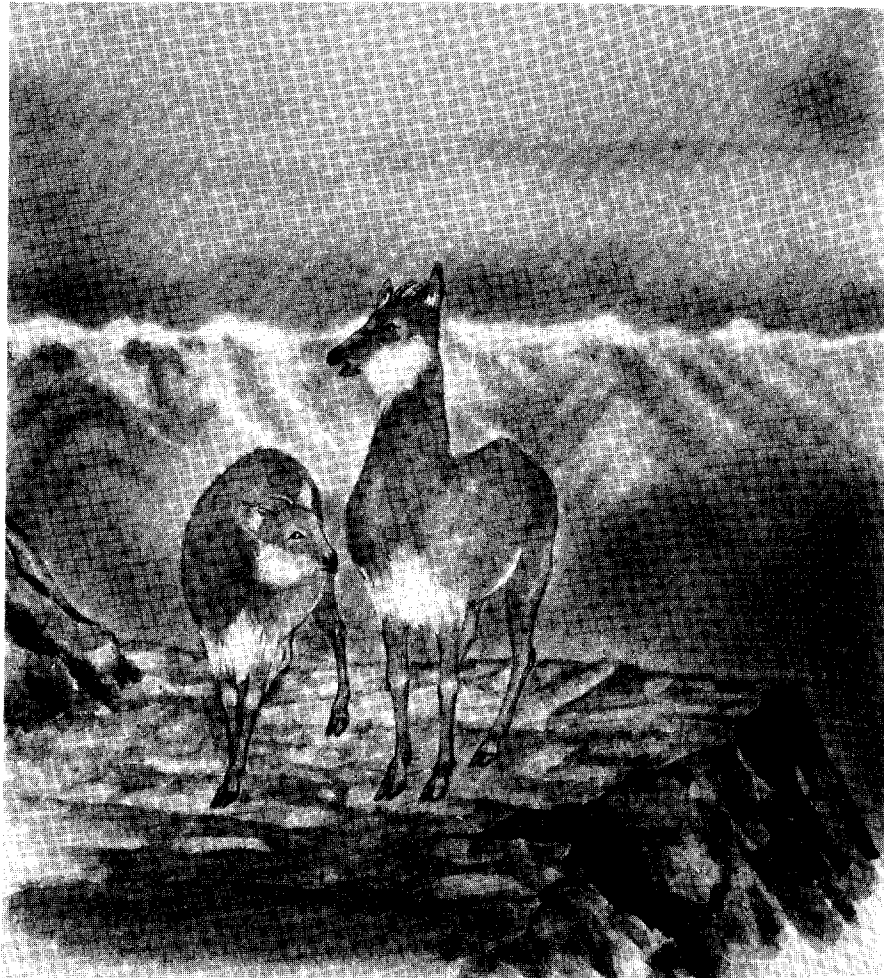
類語辞典 鈴木・広田編 B5 一八〇〇円

類義語辞典 徳川・宮島編 B6 三三〇〇円

表現類語辞典 藤原与一他編 B6 四四〇〇円

新版 文章表現辞典 神島・村松編 B6 二二〇〇円

# 季刊 連句 第32号



東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741~2

現代連句とは何か(南柏雑記 30) ..... 1  
 コロンブスの卵 ..... 鈴木春山河 ..... 2  
 「鶯の羽も」の巻鑑賞(最終回) ..... 東 明 雅 ..... 4

第三十六回 猫 蓑 会 ..... 7

捌 東 明雅 穴沢篤子 大窪瑞枝 坂本孝子  
 歌仙七巻  
 下鉢清子 副島久美子 福井隆秀

「蓑虫」付勝練習二十韻 ..... 14

沙 羅 の 会 ..... 16

捌 八角 澄子 文 坂本 孝子  
 捌 瀧川 雅代 文 米谷 貞子  
 捌 下坂 元子 文 雜賀 遊  
 捌 若尾よしえ 文 式田 和子

「電腦連句」のことども ..... 林 義 雄 ..... 24

義仲寺正式俳諧小記 ..... 小林しげと ..... 26

電通連句部 捌 東 明雅 ..... 27

赤山連句会 捌 秋元正江 ..... 27

湘南連句会 捌 式田和子 ..... 27

柏 連 句 会 捌 瀧川雅代 梅田利子 五十嵐譲介 ..... 28

雁帛往来 ..... 29

現代連句とは何か

南 柏 雑 記 30

雅

現代連句を説く前に、まず、連句とはどんな特徴をもつ文学形式なのかを考えてみよう。5・7・5の長句と7・7の短句を、交互に何句か続け一巻とするだけなら、明治時代の新体詩と変わるところはないではないか。

連句は座の文学で、そこに連句の特質を求める人もある。しかし、中には座を組まないで、ひとりで一巻を完成する独吟という形式もある。独吟だって連句たることには差支えないとすれば、座の文学たることだけが連句の本質でないことは明らかであろう。

さらには、連句は挨拶・滑稽が必要である。これが連句の文芸性であるという説がある。しかし、芭蕉の作品にも挨拶のない巻は多く、滑稽のない巻は無数である。

それならば、連句を連句たらしめるものは何か。A・B・Cと句をつらねた場合、AとB、BとCとは、それぞれに何かの点で付いていることが必要なのである。AとB、BとCは、俳句でいう二物衝突の関係になり、付け合わせられることによって、AでもBでもない新しいイメージを生じなければならぬ。BとCとの関係も同様である。これを仮りに「付けの理念」と言おう。

さらに大切なことは、A・B・Cが並べられた時、Aと

Cとは同じ事、同じ物、同じ表現など、とにかく同じもの、似たようなものであることを極力忌み嫌う。これを「転じの理念」と言おう。

連句とはこの付けと転じとで、展開して行くもので、これこそが、日本人が発明した独自の文芸のメカニズムなのである。

連句と言われるものはすべて、この付けと転じのメカニズムによって成り立っているもので、この付けと転じこそが連句の生命である。これがないものは形は似ていても、決して連句とは呼べないであろう。

それ故によい連句を作るにはその「付心」をはっきりして、付味が良いことが必要であり、また、転じを考えるためには、決して打越に返らぬように、歌仙ならば三十六歩先へ先へと進むべきであろう。このためには輪廻にならぬように式目を守るべきであり、付味無視、式目無視の連句などは、連句ではなくて、新体詩のできそこないである。

一月十五日、現代連句シンポジウムが行なわれ、パネラーならびにゲストから、いろいろ新しい説を拝聴したが、連句をいかに新しくするかという点にのみ、重点がおかれ、ついで、連句とは何かということをお忘れの方が多かったように拝見した。いくら現代連句といっても連句の本質を離れては無意味であろう。一言苦言を呈する次第である。

# コロンプスの卵

鈴木春山洞

古来、城塞の構築に従事したものは斬殺されるのが恒例であった。歴史も常に、これを抹殺して来た。オーバーな表現と思われるかも知れませんが、今や、国民文化祭・連句大会の表も裏も知り悉くした鈴木春山洞のような存在は、連句界にとって目障りな存在でしかないらしい。續にさわって仕方のない存在であるらしい。東明雅先生は第5回国民文化祭・愛媛90・文芸大会・連句大会について書くよ、御徳憑下さるが春山洞自身はもう国民文化祭を忘れることに努めています。そっとして置いて下さいませんか。

○国民文化祭は毎年開催されるお祭りだよ。松山大会の過大評価は避けよう。あの程度の大会は、君、毎年繰り返し開催されるよ。俳句会に較べてみたまえ、九牛の一毛だよ。

○国民文化祭は毎年開催されると定まっているお祭じゃあないか。そんなもの大したものじゃあないよ。今度は何処かな。あっそうか、千葉千葉。

○連句協会々報もニュースに飢えてるんだね。手放しじやあないか。あんな四国の、ド田舎でやったことを大

仰に取り上げてサ、見苦しいよ。

○お祭さわぎじゃあないか。どたばたを、これから毎年繰り返されるんじゃあ、かなわんなあ。変なもの始めてくれたな。連句だけは、こういうものに超然とした存在だと思っていたのに……

○君、今世紀最大規模の連句大会なんて、言ってくれるじゃないか。あんなもの、すぐ破れるよ。記録は破られるためにあるってことを忘れるなよ。大きな面するなっことよ。

○毎年全国何処かで繰返し開催されているお祭さわぎじゃあないか。それも四国の松山なんて田舎のグサイこと、中央で通用すると思ってるの。思いつがるのも、いいかげんにしたまえ。

○予算の全てを役人に握られた官製の猿芝居。どたばた連句大会。魅力ないよ。町民文学の雄「連句」を役人に屈服させるなんて、とんでもないこと、やってくれたな。残念だよ。見そこなったよ。男のやることじゃあないよ。連句人の面汚し。

○入選作品集って、あれ、なんだい。審査員(選者)が

自分の結社・派閥の作品を選ぶことに努力し、ずらりと並んだ大賞(九賞)の中に、審査員が五人も受賞者で並んで圧巻だったなあ。

○そうそう、審査委員長として審査講評する予定だった先生が、受賞者に廻ってしまったので、現地事務局は、あわてて審査講評者を頼みまわったんだって。△そんなことはしません。全て連句協会本部にお願いして居りました。▽

○連句大会入選作品は、連句会の伝統を破り、そこなうものである。「和」をたつとぶ連句の世界に、大賞を導入することは、結社間の競争意識を助長するものである。連句に大賞は不要である。

○連句大会入選作品集は、審査員(選者)中心主義を貫いた等と言って得意がって居るが、とんでもないことである。審査は公開されないことを原則とするのが、連句界の伝統であった。良き伝統は保持されねばならない。

○今回の連句大会入選作品集のあり方は、審査員(選者)のあり方そのものを一般的立場から逆に審査させるという、とんでもない結果を生みだし、審査員(選者)の存在・権威を著しく傷付け、連句の「和」を尊ぶ精神にもとり、連句の伝統を破ったものである。

○連句作品の審査にあたって、大宗匠の持ち点が群小審査員の持ち点と同列に置かれたのは判らない。

○審査に当って何故、特選10点・優秀5点・佳作1点と

定められたのか。特選は739点。優秀は123点。佳作1点であるべきではないか。

○審査員の選び方がおかしい。県外17名・県内3名の比率は、どのようにして定めたのか。

○審査員の選び方がおかしい。本人の内諾もなく審査員にして置いて、後から承諾書を集めるやり方は納得出来ない。

○連句大会入選作品集と称しながら、何故「佳作」入選作品を特選・優秀と同等に扱わないのか。

○皇太子殿下行啓の名を借り連句界の伝統を破り、連句実作会を早朝実施して、日本全国の連句人に大迷惑を掛けたことを、どんなに反省しているか。

○皇太子殿下の行啓は受けるべきではなかった。「連句」は何処までも庶民の文学としての孤高性が尊重されるべきだったのだ。

○国民文化祭・参加料無料を謳いながら、何故、連句前夜祭だけ有料にしたのか。他の三部門(俳句・川柳・短歌)の前夜祭は、松山市主催で参加料無料だったと言うではないか。

○国民文化祭・参加料無料は結構だが、実作会中に茶菓の接待もなかったのは残念である。茶菓が欲しいと言うのではない。皇太子殿下行啓とか小役人の指図に振りまわされて、連句界の佳き伝統を破って欲しくなかった。人間的温かみに欠けた大会であったことを知っているか。

国民文化祭は「連句」を普及させる最良の方法であると信じている。第1回から第4回までの苦渋と焦燥は、コロンブスの卵が立ったことよって解消した。愛媛で新規分野の「連句」は、千葉で実績分野・石川で継続分野になり、岩手・三重と国民文化祭正式事業として永久に開催実施される事だろう。伊賀貞雪愛媛県知事は、鈴木春山洞を名指

## 「鳶の羽も」の巻 鑑賞 (最終回)

東明雅

して感謝状を贈り「第5回国民文化祭・愛媛90の開催に当たりその趣旨を御理解のうえ祭典の成功のため多大な御協力をいただき文化の向上に寄与されましたのでここに深く感謝の意を表します。平成二年十月二十八日」と。以って際すべきか。

35  
たぐらの雲のまだ赤き空  
一構蹴ぐる窓のはな

凡兆

(現代語訳) 踏鞴の煙が赤々と立ちこめている辺りに、蹴を作る一部落があり、その一軒の家の窓辺に桜の花が咲いている。

(付心) 起情の句。其場の付。踏鞴は必ず人里はなれた所であり、その近くにある革細工人を付けたもの。

(付味) たぐらと蹴は位の付。

(転じ) 庶民の生活、それも下層の社会の気分は変化していないけれども、「窓のはな」で、やはり明るい気分が加わっている。

36  
一構蹴つくる窓のはな  
枇杷の古葉に木芽もえたつ

史邦

(春。木芽。人情無)

(現代語訳) 蹴を作る一部落の窓辺に花が咲き、枇杷の古葉の間からは、目のさめるような新芽がふいている。

(付心) 遁句。其場の付。

(付味) 枇杷の古葉と蹴を作る家業とは位。もえたつ木の芽は、花の豊麗さにつりあい、ともに巧みな照応を見せている。

(転じ) 打越が人情無なのに、この句も人情無である。その点、前句をはさんで、景は変化しているけれども、全体の気分としてはあまり転じていない。

(補説) 「木の芽」は当時、初春(正月)の季語として用いられた。この句の場合、特に「木芽もえたつ」として用いるのは、前句が晩春であるために、「枇杷の新芽が相当伸びて、古葉との色の対照が目立つようになった季節」を言いたかったのである。

以上で「鳶の羽も」の巻の鑑賞を終わったが、全体についてももう一度振り返って見たい。

この「鳶の羽も」の巻は、元禄三年(一六九〇)冬の作品で、「木の下に」の巻(「ひさご」)から、約半歳ほどの作品である。芭蕉はこの元禄三年四月から七月まで、国分山の幻住庵にひとり静かな生活を送って、新しい作風を作り出す工夫をしたと言われるが、「ひさご」と読みくらべてみると、いろいろな点に相違が見られる。

まず、表六句は、初時雨に濡れ、樹上に蕭々たる姿の鳶

(補説) 蹴は馬具の名称。馬の尾のつけ根から鞍橋になぐ帯緒。また、馬の頭・胸・尾に掛けるひもの總称とも言う。馬具は皮革製品であるから、それを作る人々は、多くは村外れに一かたまりで住んでいた。これが「一構」である。

「窓のはな」はもちろん、桜の花であるが、「家のはな」あるいは「庭のはな」でないところに、窓近く見えている人物の存在を暗示し、かつ、親しみやすく、明かるい気分になっている。

と、木の葉のはらはらと散ったあとの静寂を描き、それが股引を朝から濡らし川を渡る生活、狸の民と庶民の生活相に移りさらに月の定座には山里の閑寂な住居とそこに住む主人の狷介な人柄を紹介するなど、変化はなめらかであり、それぞれに人生・自然の奥深いところを描いている。「ひさご」の表六句にくらべ、一段としっかりととした味が感ぜられる。

裏十二句は墨絵を書きなぐる隠逸・高踏の気分が始まり、自足・平穩の気分から修験者が登場してやや俗の世界に入ったかと思うと、芙蓉の花、水前寺海苔が出て、さらに唐の茶人盧同の下男など、花の句も穏かな花が付けられ、折端には「ひとり直し今朝の腹たち」とおかしみが入っている。この十二句には總じて脱俗・高逸の世界がさまざまに描かれ、一見、単調のようにも見えるけれども、芭蕉が苦心して完成した余情付(句・響・うつり・位などの付)と、転じにおける自他場の別とが完璧な姿で示され、たとえば芙蓉のはなのはらくとちる

吸物は先出来されしすいぜんじ  
三里あまりの道かゝえける  
この春も盧同が男居なりにて  
さし木つきたる月の朧夜

凡兆

など、微妙な転じのおもしろさ、複雑で豊かな付味を十分味わうべきところである。いわゆる猿蓑調の代表的付合と言ってよいであろう。

名残の表十二句は、折立から、何かただならぬものを感



日は海に

穴澤篤子捌

日は海にかへるや御行仏の座  
 月太りゆく初風の嶋  
 父と子の団扇作りを励みゐて  
 囁り聞きつ煙草くゆらす  
 剪刀の羊群れゆく山の裾  
 今朝受けとりしバイク新型  
 デザイナー修業トウキョウニューヨーク  
 誰に似てゐる伊達な口髭  
 「愛される理由」を読んで愛されず  
 湾岸危機に一喜一憂  
 ぼうぶらの濁れる水に浮き沈み  
 熱き珈琲またすすめられ  
 高階にひとり占めして望の月  
 衣桁にかかる重陽の衣  
 威銃返しのはるかにも  
 小犬を連れて歩く公園  
 町長選終れば花の便り来て  
 音楽教師春風邪の午後

篤子 捨離引越センターもめてをり  
 正江 相続税などわたし知らない  
 みづゑ 顛骨に頑固印の長寿眉  
 淳子 自慢話を立つきっかけに  
 達子 九十九折峽深くして雪もよひ  
 健悟 謎が謎呼ぶ壬申の乱  
 志げ子 あひみてののちのころに罪重く  
 悟 離婚三婚フォークスの種  
 淳 ぴかぴかに鍋を磨くの別れるの  
 志 熟れし苔桃卓にそのまま  
 淳 棟上げの扇車に月明り  
 志 西鶴忌とて池の鯉賞で  
 達 ヴァッカスを名乗りて酒を買ひにゆき  
 淳 帰れぬ故郷慰ふ民族  
 同 砂に文字書いて子供に伝へたる  
 淳 日曜ごとのマラソンに出て  
 同 花万朵大音声に晴れわたり  
 悟 東風ひるがへす旅人の袖

江 淳 達 志 悟 淳 志 同 江 志 達 淳 江

初懐紙

大窪瑞枝捌

初懐紙墨東芭蕉記念館  
 結び柳に映ゆる床の間  
 干鏢熱き茶漬をふるまひて  
 春のスキ一の支度する子等  
 臘月梢のあやめも分かりかね  
 猫うづくまる裏の原っぱ  
 おしらさま又新しき布重ね  
 手紙やさしく文字も言葉も  
 噴水に火照りをさます彼のキス  
 夕焼け空にビルの林立  
 戦争か平和か今日が正念場  
 出番遅しと黒幕のかげ  
 遊眠社渡り台詞もめくるめく  
 フェイクの毛皮なめらかな月  
 手作りのティラミスちよつとこつがあり  
 いつも素敵な僕の叔父さん  
 花の下記念写真に皆笑ひ  
 菜畑低く蝶々飛び交ふ

瑞枝 永き日のいろはに並ぶ謡本  
 貞子 胡座をかいてふくむ吟醸  
 芙蓉子 物言ふも逢ふも懶し冬深く  
 澄子 寒雷荒るる真夜ほしいまま  
 杉亭 かなれば歳の違ひがなんでせう  
 利子 獣かくせる人の膚に  
 貞子 細密画インドの女神指そらし  
 紗 三光鳥のほいほいと啼く  
 同 貞子 「晩年」を晩年に読む桜桃忌  
 同 貞子 さっと洗って卓の灰皿  
 同 貞子 宿直のひとり月見る測候所  
 同 貞子 稜線露るる高西風の後  
 同 貞子 爽やかにモーツァルトを合奏し  
 同 貞子 寸胴鍋に煮込むすね肉  
 同 貞子 原稿の樹こつこつと埋めをりぬ  
 同 貞子 待ちに待ったる鮎の巣離れ  
 同 貞子 花万朵湖北の汀縁取りて  
 同 貞子 ロードサイクル陽炎のなか

貞 淳 達 志 悟 淳 志 同 江 志 達 淳 江

小正月

坂本孝子捌

一灯に祈る平和や小正月  
あづき粥煮る厨辺の妻  
宿場町崖のかたかご咲き初めて  
間近に仰ぐ残雪の峰  
有明の囀り耳に溢れつつ  
大極拳の人集ひ来る  
ちらし撒きファーストフード開店す  
郵便受にお目当ての文  
しのび逢ふ恋とかくれて吸ふ煙草  
加茂の祭の牛はのろのろ  
拍子よく鱧の骨切るやとひ婆  
生死は年の順にあらざり  
月明の池に翳する松の濃く  
モダンアートの多き二科展  
不器用な芸やや寒く三枚目  
送り太鼓にそぞろ歩める  
花尋めて吉野の旅の歌日記  
雨もあがりて麗かな午后

孝子 籬の客ジーパーンきつく座りたり  
春山洞 グラビアめくるパーマ屋の椅子  
治子 仏とも神ともつかず新宗教  
ますみ 苦勞の仕上げ私限りで  
和子 人前で笑ってかけてまむし酒  
路子 胸のほくろを知ってゐる奴  
雅代 枯草の岸に子が待つ廊舟  
同 もがり笛とも叫び声とも  
路 物差しがあれば鉄がまたみえず  
治 つもっては捨て困む麻雀  
和 雲はらひ今中天に望の月  
み 蔵の荒壁蚯蚓鳴きゐて  
洞 鉄色の袴低めに風炉名残  
代 左ハンドルちよつと自慢に  
和 テクノロジー追ひつき難くマイペース  
和 鯉ゆるやかにおよぐ庭園  
み 選ばれて皇居に上る花の頃  
和 頬杖をつく春の夕暮

路孝治路代和み治代和代孝路代路和路み

都鳥

下鉢清子捌

ふんはりと都鳥浮く隅田川  
日脚伸びたる橋の欄干  
アトリエの筆架に筆を揃へるて  
ちよつと一服紫煙くゆらす  
蝗捕りめつきりふえた有機農  
夜なべ続きの団地自治会  
梵鐘に三五の月の響きあり  
食気旺盛恋はまだまだ  
この頃のもてる若者しようゆ顔  
創刊雑誌出るたびに買ふ  
キヤスターになりたていつもつつ走る  
夏嶺を望む単線の駅  
焼酎で困む車座また軍歌  
猫抱き上げて階段を降り  
幼児を連れたるひとが神を説き  
とりこみ中ですどうぞ隣へ  
月出づる気配はらみて花爛漫  
人影ゆらと春の障子に

清子 亀鳴くと畦道のどこ曲らうか  
弘子 信号黄色アクセルを踏む  
元子 迷彩服四十万が砂の国  
子 羊の皮の苞かわに煙突  
子 夕凍みの何であの娘がかく愛し  
藍子 なまはげの鬼初嫁を追ひ  
哲 同病の慰められて慰めて  
利 使ひこなせぬ文明の利器  
郁 さりげなく新人OL O A し  
同 弁当箱の焼いたおにぎり  
同 裂織の機踏み仰ぐ軒の月  
哲 数珠玉振れば乾く音する  
弘 ぞぞろ寒唯野教授を気どる奴  
元 工場建ちゐし故郷の潟  
藍 おもかげの魚釣る父の肩うすき  
哲 エープリル・フルおこごとの夢  
利 花の歌あまたひととき花に寝む  
清 雨後の籬に陽炎のたつ  
弘

弘清利哲郁藍弘元清哲同郁利藍利元哲郁





